

道徳科 授業の様子 授業者：六浦 悠希

道徳科では、第1学年「伝統や文化を継承するとは」の主題で授業を公開しました。主題のねらいは「伝統や文化の担い手として次代に引き継いでいこうとする実践意欲を高める」とし、家庭分野との教科横断的な学習によってこのねらいに迫ろうと考えました。本時は、資料「レオナルドと僕」を読み、「私たちはどのように伝統や文化と関わっていけばよいのか」について考える場面で、登場人物・新の「危機なんて少し大げさなんじゃない？」という言葉に表れている思いや「一本取られた」ような気がしたときの思いを考えることを通して、これまで培われてきた伝統や文化を受け継いでいこうとする実践意欲を高めることを目指しました。

【本時までの学び：家庭分野と道徳科を連携させた指導計画（A生の振り返りから）】

【第1時 家庭分野】

浴衣を実際に着用してみて、予想通り動きやすさや着やすさについては難しさがあった。ただ、体型が変わっても着られたり、様々な用途に変えて長く使えたりするよさもあることが分かった。夏祭りや特別な行事の日には着てみたい。

【第2時 道徳】

主人公のような「自分の力で伝統や文化を守りたい」という思いをもち、全力を注いでいる人がいるから、ねぶた祭は何百年も続く歴史のある祭りになっていると思う。

【第3時 家庭分野】

お宮参りや七五三の祝い着の模様に込められている思いを調べたことで、昔から着る人の「幸福」や「豊かな暮らし」を願う思いが込められていることが分かった。

【導入】 教師は、現代まで残っている日本の伝統や文化と、今や、これからを生きる私たちはどのように関わっていけばよいかを問い掛け、答えに悩む生徒の姿から、本時の学びのテーマ「私たちはどのように伝統や文化と関わっていけばよいのか」を設定しました。

【展開】 生徒は、教師の音読を聞きながら自分が共感した部分に線を引いていきました。「危機なんて少し大げさなんじゃない？」という新の言葉に共感している生徒が多数いたため、新のどのような思いがその言葉には表れているのかを全体で考えました。生徒からは、「無関心や他人事で、身近だからこそ気にならない」といった新の思いが語られました。そこで、教師は、「そんな新だけど、最後には一本とられたような気がしています。どうしてだろう。」と生徒に問い掛け、さらに深く新の思いについて全体で考えていくことを確認しました。生徒は、「自国の文化を発展させようとしている新の友人・レオナルドへの尊敬の思いがある。」という考えと、「悔しさや後悔から素直には認められない葛藤がある。」という考えを語りました。そこで、教師は、「新は、この先に和菓子とどう関わっていくのだろう。」と問い返すと、「和菓子について知ろうとする。レオナルドのように剣道で新しいことに挑戦していく。」といった新が日本の伝統や文化と関わろうとする行為が語られました。そして、教師は、「あなたは、どのように日本の伝統や文化と関わっていきますか。」と問い返し、生徒は、テーマに立ち返って自分の考えをまとめました。



【終末】 K生は「身近な地域の活動にも日本の伝統や文化はあると思うから、まずは祭などの活動に組み込みたい。また、自分はサッカーをやっているから蹴鞠とサッカーをレオナルドのように組み合わせてよりよくすることができないか考えてみたい。」と記述しました。R生は「私だったら、関わっている人は少ないけれど大切な琴という日本の伝統芸能に取り組んでいるので、琴と関わりのある和服とも関連付けながら、発展していけるようにしていきたい。」と記述し、それぞれ実践意欲を高めていました。

【研究会のまとめ】 友と対話をしながら、自らの考えを深めていく生徒の姿に、肯定的な意見を多くいただきました。生徒たちの道徳性の高まりをより促すために、学びのテーマである「伝統や文化」をどのように板書に位置付けるかや、「『あなたならどう関わる』という投影的発問により時間をかけてもよかったのではないか。」といったご意見をいただきました。また、本時だけではなく、日本の伝統や文化に触れる様々な教科と連携した指導計画を立てることや、複数年での指導計画を立てていくことで、より多くの生徒が実践意欲を高めていくのではないかと考えます。共同研究者の高柳先生からは教材の工夫を深く読み解く重要性や視点を教えていただきました。今後も教材研究を重ね、「考え、議論する道徳」の実践を重ねていきたいです。